

# 『黒岩の織り姫さま』 ～貝塚に伝わる民話～



① むかし、貝塚の三ヶ山村に、とてもきれいな娘さんがいました。村の若者だけでなく、遠い村からも、その娘さんを一目見ようと、この家におしかけました。この娘さんが織った布は、すばらしいのでしたので、高く売れました。おかげで、家族は幸せにくらしていました。



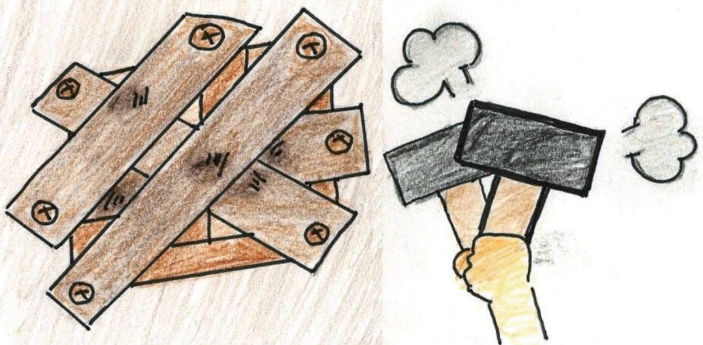
② ところが、毎日、たくさん若者たちがやってきて、部屋の窓ぎわでさわぐので、娘さんは気がちり、はた織りのしごとが進みません。両親は、こまってしまういました。そこで、若者たちが近づけないように、さくをつくり、部屋をかこみました。すると、娘さんは落ち着いてしごとができるようになりました。部屋から、こちよいいはた織りの音が聞こえてきます。

カラカラ トーン トン  
カラカラ トーン トン

③ 今度は、窓に板を打ちつけて、閉ざしました。お日様の光がさしこまない部屋は、真っ暗になり、さうそくのあかりがともされませんでした。部屋から、再びこちよいいはた織りの音が聞こえてきます。

カラカラ トーン トン  
カラカラ トーン トン

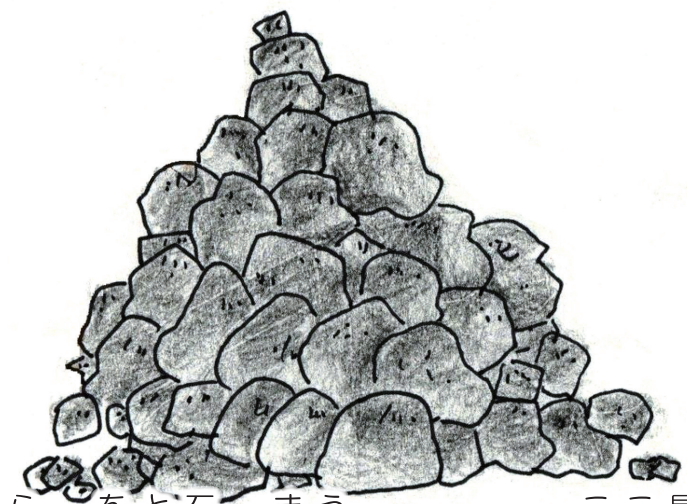
④ しかし、おだやかな日々は、そう長くは続きませんでした。若者たちは、窓の板をはがし、はた織りをしている娘さんを、再び窓からのぞくのでした。はた織りの音は、また聞こえなくなりました。両親は、またまたこまってしまうました。



④ 今度は、石をつみ上げ、石の部屋をつくり、のぞくことができないうようにしました。石の部屋に娘とはたをうつすと、再びこちよいいはた織りの音が聞こえてきます。

カラカラ トーン トン  
カラカラ トーン トン

⑤ 今回ばかりは、若者たちもこつするともできず、あきらめました。



ところが、数日すると、その石の部屋が、娘さんとはたもろとも、大きな一つの黒岩へと姿を変えてしまいました。村人は、黒岩の中に閉じこめられた娘さんを

『黒岩の織り姫さま』と呼び、鳥居をたてておいのりしました。



⑤ 三ヶ山には『黒岩大明神』だいみょうじんとして、娘さんとはたを閉じこめた黒岩が、鳥居とともにのこっています。また、その黒岩に耳を当てると、はた織りの音が聞こえてくるといわれています。今でも、さいほうや織物が上手になりたいと、お参りする人がおとずれています。

